
戦場の闘騎士物語

鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦場の闘騎士物語

【Nコード】

N3579R

【作者名】

鵜

【あらすじ】

この世界とは違う世界、鋼鎧獣という生物がいて人々はそれに対抗する力を持っている。そんな世界にあるフォートレスと言う都市の騎士学校にアルサスという男がこの転入してきた。アルサスは騎士学校である女生徒と出会い様々な出来事を経て少しずつ自分を変えようと思いはじめた。バトルファンタジーものとして書きました。

1話 騎士学校

「ねえ、どうしたの？」

いつも親がいなくて村の人に迷惑をかけて申し訳ないと思っていた、自分の力が必要とされると聞いた時は自分が町のためにできることがあるとわかって嬉しかった。

「どうしてほめてくれないの？」

だから僕が試合に勝った時はみんな喜んでくれると思ってがんばった。

「僕ちゃんがんばったよ？試合に勝ったんだよ？」

なのに帰ってきた僕に向けられたのはまるで恐ろしいものを見るような視線だった。

「おじさん、みんなどうしたの？なんか変だよ。」

みんなにほめてもらえると思ってた僕は村の人達の反応を変に思い、そのことを養父であったおじさんにたずねた。しかしおじさんから返ってきた反応は理解のできないものだった。

「ひい！」

「え？」

おじさんは小さく悲鳴を上げて僕から距離をとった、僕は呆気に

とられてその場で立ちすくんだ。

その日から村の人達の僕に対する態度はおかしくなった、おじさんは家の中ではぼくを避けるようになり、話しかけても苦笑いを浮かべてすぐにいなくなってしまう。

外に買い物に出かけても皆前のように接してはくれず腫れ物を扱ふような態度だった。一緒に遊んでいた子供たちも僕を見ると逃げ出すようになった。

そうして月日が過ぎ、僕がその理由に気が付く頃には僕の周りにはいたのは試合のことを知らなかった妹だけになっていた。

妹が成長し村の手伝いもちゃんとできるようになった頃、僕は村を出ることを決めていた。妹は理由を聞きたがったが余計な心配はかけたくなかったのだから、ただ大きい都市の学校に行きたいから、と伝えていた。

そのことをおじさんに伝えると初めは驚いていたもののすぐに喜んで荷造りを手伝ってくれたし、少しではあるが旅費もくれた。村の人達も喜んだ様子で見送ってくれた。ただ一人だけ僕の出発を悲しんでる妹のことだけが心残りだった。

「どうしても行っちゃうの？」

荷物を背負って村から出て行くこととする僕の裾を掴んで妹がたずねた。見送りは妹だけだった。

「うん、ごめん、でもいつか帰ってくるからそれまでのお別れ

だ。」

僕も妹と別れるのは少し寂しかったけどこれが村のためにも僕のためにも、そして妹のためにも一番よい方法だった。

妹がいつまでも“化け物”の妹であると村の人から冷たい視線を浴びさせられるのも見ていて申し訳なかった、僕がいなくなれば真面目で素直な妹のことだから少しづつ村に溶け込めるだろう。

「それじゃあもういくね、元気でね。」

そういつて今にも泣き出してしまいそうな妹に別れを告げその日は僕は村を出た。

この世界には“鋼鎧獣”という生物がいる。

鋼鎧獣は太古よりこの世界に存在する生物でその種類は多岐にわたり、容姿や特性、生態系などは各個体によって全く異なるが総じて体の一部に“希鉱玉”と呼ばれる鉱石を持っている。

鋼鎧獣は色や大きさ、形状の違いはあれどこの希鉱玉を核にしてその体を維持している。空气中に存在する“練氣”を希鉱玉に取り込みそれをエネルギーとしている。

そして鋼鎧獣と共にその世界に存在していた者たちがいる“人間”と呼ばれる種族である。人間は鋼鎧獣を自分達の敵とみなし、自分達よりもはるかに強力な物も存在する鋼鎧獣と戦っていた。

人間は鋼鎧獣に対抗するために“アーマライズ錬装発現”という能力を持っていた。錬装発現は錬氣を媒介に使用する力で魔法のようなものだ。錬装発現を使える人間を“発現者”と呼んだ。

発現者は皆身体能力が高く、錬氣を体に纏まとうことで刃を通さないほどの力を得ることができた。

錬装発現は個人によって全く異なるもので能力が発現するまではどんな力かわからないものである。錬装発現は誰しもがもっているものだが発現までの時間には大きな違いがあり、生涯を能力が発現しないまま終える人もいる。

また錬装発現の発現には本人のイメージや感情が大きく関わっていて、それが関係する場面で能力の発現が多くなる。

発現した能力はまず何らかの形を取る、剣やナイフ、本や杖などの発現者の望む形に近い形状を取りそれらは“デュアルウェポン錬装兵器”と呼ばれる。錬装兵器は見かけどりの力しか持っていない、武器の形状を取っている物そのまま武器として使えるが他の物は武器としては使えない。錬装兵器に錬氣を媒介として能力を使用する、そうして初めて錬装発現とよばれる。

人間は錬装発現を使い鋼鎧獣と戦っていたがその日常は辛く、多くの被害者がでることもあるものであった。

そこで人間は鋼鎧獣との共存を考えた、どうにかして鋼鎧獣の力を使うことはできないかと。そして取った方法は比較的温和で強力な鋼鎧獣を各集落で養いその力をかりることだった。

鋼鎧獣のエネルギーは空気中の錬氣だが鋼鎧獣が一度に希鉱玉に

取り入れるのは限度があつた。そこで自分達で倒せる鋼鎧獣から錬氣の魂である希鉍玉を入手し、それを集落の鋼鎧獣に与えるというものだつた。鋼鎧獣には知能の高い物も多くそうして手なづけた鋼鎧獣に集落を襲つてくる鋼鎧獣を撃退させることが可能となつた。そして鋼鎧獣を所有する集落を“守護都市^{レギオン}”と呼んだ。

高純度な希鉍玉を摂取している守護都市の鋼鎧獣はしだいに強力で巨大なものへと成長して行つた。個体によっては一つの島ほどの大きさの物もいてそれらはそれぞれ大きさごとに村、町、国と呼ばれる大きさになりこつした鋼鎧獣を“守護獣”と呼んだ。

こつして鋼鎧獣に襲われる危険は軽減したが変わりに鋼鎧獣の食料である希鉍玉が問題となつた。鋼鎧獣が成長するにつれ食料である希鉍玉も大きな物やより高純度な物が必要となつた。この問題を解決する方法として、一部の守護都市の者がそれぞれの守護獣の希鉍玉を食料にはどうか、と提案した。

守護獣の希鉍玉は成長につれ、大きく高純度の物となつていた。たしかに食料にするにはこれ以上とない物だがそれは各守護獣の生命源でもある。守護獣の希鉍玉を食料とすることはその守護獣の弱体化に繋がり各守護都市の危険に繋がつていた。確かに守護獣は強力だが野生にもそれと同等かそれ以上の鋼鎧獣も稀に存在していた、なので守護獣が強いに越したことはなかつた。

しかしその考え以外に鋼鎧獣の食料を確保する方法は考えつかず、しかし守護獣同士を争わせてはそれこそ本末転倒である、そこで守護獣同士を戦わせるではなく人間が代わりに戦うというものであつた。負けた側の守護都市が守護獣の希鉍玉の一部を勝者側の守護都市に差し出すというものだつた。

この方法ならば負けたとしても守護都市はダメージは受けるが、すぐさま滅びてしまうということもなかった。こうして決まった人間同士の戦いを“トライバル”と呼び、戦う人間を“闘騎士”と呼んだ。

トライバルは各守護都市の選んだ100人の闘騎士が同時に戦うもので一見規模の小さいものに見えるが、戦う闘騎士はそのほとんどが発現者でありその能力は鋼鎧獣にも匹敵するものであり、トライバルはまるで縮小した戦争のようなものである。トライバルは基本殺人は認められていないがその内容より死人がでることもあった。こうして守護都市の間でのトライバルが一般化してどの守護獣でも行われるようになった。そして各守護都市ではトライバルに勝利するため参加する闘騎士を養成する教育機関を設立した。

この教育機関を“闘騎士養成学校”と呼んだ。

「これが今日から俺の通う学校か。」

巨大な門の前に一人の男が立っている、身長は175、6シクぐらいで体つきはやや細身であるが筋肉はしっかりと付いている、髪は銀髪で門を見つめる瞳は少し赤のかかった茶色である。

この巨大な門はここ、“フォートレス闘騎士養成学校”通称、フォートレス騎士学校の校門である。フォートレス騎士学校はこの守護都市フォートレスにある養成学校の中で最古にして最大の闘騎士養成学校で、この都市の闘騎士の半分がこの学校の出身者であるという由緒ある学校である。この学校は将来有望な闘騎士を養成するためフォートレスはもちろん他の守護都市からも生徒を募集してい

る。

この男“アルサス・ウエールズ”はこの騎士学校に入学する転入生だ。本来ならば一週間ほど前の入学式に間に合う予定だったが色々入国審査に時間がかかり入国が遅れてしまい始学式には間に合わなかったのである。

アルサスは巨大な校門をくぐり抜け教師のいるはずの教官室に向かった。

「失礼します。」

受付の事務員に場所を教えられ教官室にたどり着き、扉をノックして中に入った。中に入ると教官たちの視線が一斉に集まったがすぐにそれは無くなり、代わりに一人の男が近づいてきた。

「お前がアルサス・ウエールズか？」

声をかけてきたのは壮年の男で年は30代くらいに見え角刈りの頭にぎよろりとした大きな目をしていて、見るからに軍人のような雰囲気である。

「そうです。」

「俺はお前のクラスの担当教官のグレイルだ。」

返答するとグレイルというらしい教官はアルサスを値踏みするように見回した。

「あの、なにか？」

「いやなに、お前の力量を外見で測っているだけだ。こんな仕事を長らくしていると大体の力量は外見でわかるからな。」

そういつて今度は肩や腕などを叩き始めた。

「んで、この筋肉の付き方は普通の学生の物じゃないな。お前、ここに来る前は何をしてた？」

(くそ、しょっぱなから変な奴に捕まったぜ)

黙っていようと思ったがそれで逆に怪しまれても面倒だと考え、当たり前障りのない嘘をつくことにした。

「小さい頃に少しだけ武術を習っていたので商隊の護衛のようなものをしていました。」

「そうかそれなら腕のほうは立つのか？」

「いえ、それほどでも。実戦経験はほとんどありません。」

教官は疑問に思うことがありそうだったが時計を見て話を打ち切った。

「まあ実力は授業で見せてもらっ、そろそろホームルームが始まるから教室に向かうぞ。」

教官の指示に従い後ろについて教室の前までにたどり着いた。

「声をかけるまで廊下で少し待っている。」

教官はそう言って教室の中に入り、アルサスは一人廊下に残された。

（つたくめんどくせえ）

教室の中からは、事情があつて、転入が、などという単語が聞こえる。

（俺は何事もない学校生活を送ればいいんだよ）

アルサスがそう考えていると教室から声がかかった。

声の通りに教室の中に入ると教官室と同じく、しかし今度は逸らされることのない視線が向けられた。

「こいつが遅れてきた転入生だ、さあ自己紹介をしろ。」

これからクラスメイトとなる者達から好奇の視線を向けられながらも自己紹介をした。

「アルサス・ウェールズだ、これからよろしく頼む。」

無愛想に言う教室が静まったような気がする。教官は苦笑しながら空気を和ませるように生徒に声をかけた。

「こんな奴だがお前らも仲良くしてやれ、席は窓側の一番後ろだ。手違いがあつて名前順ではないがな。」

アルサスは教官に言われた席に向かい席に座ると隣には小さい女

生徒が座っていた。

(こいつちっせーな、本当にここの生徒か?)

隣の生徒はアルサスがそう思うほどに小さい生徒だった。そしてその顔がアルサスの方へ向けられた。

「は、はじめまして、アリーゼ・ベルフラウです。これからよろしくおねがいします。」

アリーゼと名乗った少女はきれいな顔立ちで声は少し舌足らずな感じがする生徒であった。髪はきれいな白色で腰の辺りまで伸ばしている。

(ベルフラウ?どこかで聞いた名前だ。)

アルサスはアリーゼの名前をどこかで聞いたことがあるように感じていた。

「ああ、ところで突然の質問で悪いんだがあんたの名前に聞き覚えがあるんだが。」

アルサスが返事と質問をたて続きにするとアリーゼはビクツと体を動かした。突然の質問に驚いたのか、それともアルサスの目つきの悪さにたじろいだのか、そのどちらかかまたは両方だろう。なぜなら彼は先の教官に勝るとも劣らない目つきの悪さで、小さな子供なら睨んだら泣き出しそうであり、人に道を尋ねたらカツアゲと間違えられそうなほどの三白眼である。本人にその気はまったくないのに関わらず。

「たつ、多分私のお父さんがフォートレスの闘騎士だからだと思います。」

（そうか、こいつはあのリグルス・ベルフラウの娘か）

リグルス・ベルフラウはこの守護都市フォートレスで有名な闘騎士である。この都市の闘騎士の中で最老齢の50代近くであるにもかかわらず、都市の闘騎士の中でも五指に入るほど実力を持つ豪傑でその名は近隣の都市にまで響くほどである。

アルサスがそのことに納得してしていると教官から声がかかった。

「仲良くなるのはいいが今はホームルーム中だ、そういうことは後にしろ。」

その声を聞いたアリーゼは顔を赤くして俯いてしまった。

「それでさっそくだがお前達にはこれから闘技場に向かってもらう、まずはそこで今のお前達の実力を見せてもらう。」

教官の言葉にクラスがざわめいたがすぐに席を立って移動し始めた。アルサスもそれに習いまだ顔の赤いアリーゼの後ろについて闘技場に向かった。

闘技場は屋根のない巨大なスタジアムのようなものだった。教官は全員いることを確認してから指示をだした。

「これから二人でペアを組んで順番に模擬戦を行ってもらおう、ペアはこちらで決めたもので組んでもらおう。」

教官がクラスメイト二人の名前を呼び、二人の男子生徒は闘技場の中央に行きそれぞれ自分の錬装兵器を呼び出した。

錬装兵器は使用時に持ち主の呼び出しですぐさま具現化することができ、それぞれの言葉に応じて錬装兵器が発現した。片方の生徒は長剣、もう片方は槍である。

教官が試合開始の合図をしてどちらも武器を構えると場に緊張が走った、そして数秒後長剣を持った生徒が槍を持った生徒に向かって走り出した。接近戦に持ち込むつもりだ。長剣を持った生徒はおそらく接近戦に向けた能力なのだろう。

槍を構えた生徒は近づかせまいと攻撃範囲に入った敵に突きを放った。しかしその攻撃は避けられ、避けた生徒がここぞとばかりに攻撃を開始した。おそらく筋力強化系統の能力なのだろう、圧倒的な手数で押し始めた。槍使いの生徒は反撃をすることもできずただ攻撃を捌くのが精一杯だった。

そしてしばらくしてさすがの長剣の生徒の猛攻も長くは続かず、防戦一方だった槍使いの生徒が一度長剣を大きく弾いた後、槍を大きく振うと風の衝撃波が生まれ敵目掛けて放たれた。

突然の攻撃に油断したのか、長剣使いの生徒は反応が遅れてもろに攻撃を受けて吹き飛んだ。いくら体を錬氣で覆っていても全ての威力を防ぐことはできず、立ち上がるうとしたがすぐに膝をついた。

「そこまで！」

教官の声で戦闘が終わり長剣使いの生徒は槍使いの生徒に肩を貸してもらい戻ってきた。

「どちらもいい動きをしていた、だがヤードは途中で攻め切れなかったのが敗因だ。」

教官はそれぞれヤードとカイルと言っらしい長剣使いと槍使いに評価を言い渡し、その後は同じように試合が行われた。どうやらこの学園の生徒のレベルは学生としては高いものであるらしい、とそれらの試合を見てアルサスは感想を抱いていた。

何試合が終わった頃にアリーゼの名前が呼ばれた。

「ジルベルト・フィード、アリーゼ・ベルフラウ。」

アリーゼとジルベルトと呼ばれたもう一人の男が闘技場に向かった、男はニヤニヤとした笑みを浮かべていて見るからに感じの悪い男だった。

二人はすぐにそれぞれ錬装兵器を発現した。ジルベルトの武器は先ほどのヤードの長剣を少し細長くしたようなものだった。そしてアリーゼの武器はそれよりもさらに細く美しい銀色のレイピアであった。

「かの有名な闘騎士様の娘はさぞ腕が立つんだろうなあ？」

中央で互いに剣を構えるとジルベルトがアリーゼに嘲笑と共に言葉投げかけた。

「それは私に対する侮辱と受け取っていいんですね。」

ジルベルトの言葉に怒りを覚えたのか、語気を強くして返事を返

した。

「腕の程は試合で見せます、私は侮辱されて黙っているほどできた人間ではありませんから。」

「ふん、せいぜい今のうちに吠えているがいい。」

試合開始の合図と共にジルベルトが走り出しアリーゼに切りかかった。一気に試合を終わらせる気であるのだろう、先能力を使ったヤードと同じくらいの猛攻でアリーゼを攻め始めた。

ジルベルトの腕前は大言を言うだけあり相当なものであった、能力を使わずとも一撃一撃が速く威力もあった。しかしその顔には焦りの表情が浮かんでいた。

「なかなかの腕前ですね、ですが私の方が速い！」

アリーゼはジルベルトの猛攻を冷静に捌き対処していた。そして言葉と共に繰り出された斬撃はまるで流星のような速さであった。

「くっ、くそ！」

先ほどとはまったく真逆の立場になりジルベルトは防戦一方を強いられた、しかしそれもアリーゼの猛攻を防ぎきれずどんどんと押され始めていた。

「調子に乗るな！」

ジルベルトの叫びに反応するように手にしていた剣が形状を変えた。刀身の所々に切れ目が入りまるで蛇の様にしなりアリーゼを襲

った。

本来そのような形状であったのだろうその蛇剣はアリーゼの剣に巻きつきその動きを止めた。

「もらった！」

そしてジルベルトの刀身から電撃が迸った、これがジルベルトの能力なのだろう。ジルベルトは試合の勝利を確信し笑みを浮かべた。しかしその表情は瞬時に凍り付いた。

「惜しかったですね、でもこれで終わりです。」

その電撃が刀身を伝って襲う前に剣を捨てて走り出したアリーゼはジルベルトの懐に潜りこみそうつぶやいた。

そして次の瞬間にはジルベルトの意識は顎に入った掌底によって刈り取られていた。

生徒達の歓声が沸き上がる中、アルサスはその動きを驚きを持って観戦していた。

（へえあのちっちゃいのやるな、さすがはリゲルス・ベルフラウの娘だ）

意識を失ったジルベルトは保健室に連れて行かれ、アリーゼは教官の近くに帰ってきた。

「さすがだなベルフラウ、ジルベルトもよくやったがさすがに相手がわるかったな。」

アリーゼの強さを知っていたのか教官が苦笑しながらアリーゼに声をかけた。

「多分お前が学年でトップレベルだろう、この調子でがんばれよ。」

他のクラスメイトもアリーゼの実力を知らなかったのかアリーゼを囲んで次々に声をかけた。

「アリーゼさんすごい！あんなに強かったんだ！」

「ベルフラウ強いなあ、あのジルベルトを負かしちまうなんて！」

褒められたアリーゼは顔を真っ赤にして謙遜している様子であったが周りの人はどんどん増えていく。それを見かねた教官からアリーゼを取り囲んだ生徒達に声かけられた。

「お前らもその辺にしてやれ、ベルフラウがつぶれてしまいそうだ。」

そういわれると渋々と生徒は散っていき、中からまだ顔を真っ赤にしたアリーゼが出てきた。

「いまのほとんどの試合が終わって残っているのはアルサスお前だけだ、だからお前は俺と試合をてもらおう。」

教官に突然声をかけられたアルサスは多少驚きながらも言葉を返した。

「教官とですか、それはあまりにも・・・」

「大丈夫だ、ちゃんと手加減はするし俺は能力も使わん。」

しかしグレイル教官の言葉を聞いた周りの生徒から哀れみとも恐れともつかない声があがった。

「かわいいそうだな転入生。」

「グレイル教官って元闘騎士だった噂があるらしいぜ。」

「前に手合わせした生徒が病院送りになったとか・・・」

などと物騒な会話が聞こえてくるがアルサスはそんなことは気にしていないようだった。アルサスの思考はそんなことより試合の内容に向いていた。

（教官は相当の腕前だ、どうしたもんか・・・）

「おい、時間も無いから早く始めるぞ。」

急かされてアルサスが中央に向くと教官が言った。

「俺はお前の実力はかなりの物だと思っている、存分にかかって来い。」

「買いかぶりですよ俺はたいして強くありません。」

教官の言葉にアルサスは苦笑しながら答えた。

「あとすいませんが武器を何か借りても良いですか？」

「武器？何だお前、錬装兵器を持っていないのか？」

「いえ発現はしているんですが、ただちょっと使いたくないんです。」

教官はアルサスの発言を疑問に思ったのか一瞬顔をしかめたが、錬装兵器は使用者の精神に大きく作用される武器なので納得したのか生徒に声をかけ一般的な長剣を持ってこさせた。

「理由は知らんがこれでいいか？能力無しはきついだらうが。」

「はい、大丈夫です。」

アルサスは二、三度剣を振ってみて剣の具合を確かめ、納得したのか剣を構えた。

「それじゃ始めるか。」

声と共に教官は自らの錬装兵器を具現化した、具現化した武器は刀身が長剣の数倍もある大剣であった。かなりの重量であるうそれを教官は軽々と肩に担ぎながらアリーゼに声をかけた。

「ベルフラウ、試合開始の合図を頼む。」

「は、はい、それでは試合開始！」

若干緊張したアリーゼの合図で試合が始まった。

1話 騎士学校（後書き）

かなりの厨二設定で最後まで見てくれた方はありがとうございました。最初は書いて書いた連載小説で多々問題点もあると思うので、もしよければ指摘や感想をいただきたいです。今後も続きを書くつもりなのでお付き合いいただけるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3579r/>

戦場の闘騎士物語

2011年10月8日18時44分発行